

解説「E.FORUM スタンダード 音楽科・美術科(第1次案)」について

小山英恵(鳴門教育大学・准教授)

はじめに

芸術科目において何を「本質的な問い」、「永続的な理解」とし、どのようなパフォーマンス課題を設定するかは議論となるところである。そこで、この「E.FORUM スタンダード」はあくまで2008年改訂の学習指導要領(以下学習指導要領と記す)に基づき、試案としての作成を試みた。ここでは、その作成過程において直面した問題や議論となった点についてみていこう。

1. 「本質的な問い」と「永続的な理解」について

芸術科目における「本質的な問い」、「永続的な理解」を考える場合にまず問題となるのは、何を「本質的な問い」の柱とし、その学年ごとの発展をどのように捉えるのかという問題である。

まず、「本質的な問い」の柱についての問題である。芸術科目における学習指導要領は、「表現」と「鑑賞」という2領域をもつ。一方、題材(単元)は必ずしもこの2領域を基礎として構成されるわけではない。むしろ題材は、ある主題を基に構成されるのが一般的である。芸術科目におけるこれまでの「E.FORUM スタンダード」づくりにおいては、「表現」、「鑑賞」という学習指導要領の2領域に即して「本質的な問い」を立てる方法と、各題材における主題の内容ごとに「本質的な問い」を立てる方法との2つが試みられてきた。中学校音楽科を例にとると、前者では、たとえば「鑑賞」領域において「この音楽は何を表現しているだろう」という問いが立てられている。後者では、たとえば「歌舞伎の魅力」という題材において「伝統音楽を今日まで伝え続けている魅力とはどのようなものか」という問いが立てられている¹⁾。

今回、両者の考え方を学習場面においてより発展的に統合させることを意図し、学習指導要領における2領域を柱として「本質的な問い」を練り上げていった。「表現」や「鑑賞」というパフォーマンスを柱

とすることによって、音楽や美術における様々な要素、技能、文化といった主題となりうる内容を、一連のパフォーマンスの一部として捉える。そのことによって、主題内容を、繰り返される「表現」や「鑑賞」のパフォーマンスを深める方法あるいは契機と位置付け、長期的な学習の深まりを期待するのである。

次に、学年ごとの発展についての問題である。音楽科、美術科における学年ごとの学習指導要領の内容をみると、それらは基本的に内容の大きな変化を示すものではない。学年を追って様々な新たな内容を積み上げていくというよりむしろ、「表現」と「鑑賞」というパフォーマンスを繰り返すことによって、その質を深め、洗練させていくことが目指されている。学年ごとの発展が質の深まりである以上、「本質的な問い」や「永続的な理解」が学年ごとに変化するのには適切ではない。そこで、各学校段階全体としての「本質的な問い」を立てた。同じ「本質的な問い」を、学年を越えて繰り返し問うことで、「表現」や「鑑賞」のパフォーマンスを深めていくことを想定している。

「本質的な問い」の柱とその発展の問題を以上のように定めたいので、『学習指導要領解説』を参考にしながら学習指導要領の指導項目ごとに「本質的な問い」と「永続的な理解」を設定し、そこから領域ごとの「本質的な問い」を考えたい。ただしその際、音楽科における歌唱と器楽、および創作(音楽づくり)は、前者が再創造、後者が創造という相違があるため領域ごとの「本質的な問い」を分けた。さらに、すべてを包括する教科としての「本質的な問い」を立てた。

ここで教科における包括的な「本質的な問い」に含まれる、「楽しさ、よさ、美しさ」に関して留意すべき点がある。それらがもし、ある種のポジティブで普遍的なものを意味するのであれば、それは芸術科目において本質的ではなくなってしまうということである。「楽しさ、よさ、美しさ」とは、子ども一人ひとり

が感じる悲しみや葛藤といった人生の深い味わいを包括的に含むものとして捉えることが肝要である。

ところで、各「本質的な問い」は、基本的には1つの題材において単独で扱われることは少ないと考えてよいだろう。また、「表現」と「鑑賞」の両領域を関連づけた題材構成においては、両領域の「本質的な問い」を並列的に扱うことができる。

2. パフォーマンス課題について

芸術科目におけるパフォーマンス課題を考える際に直面するのは、それが学年ごとにどのように変化するかという問題である。既述のように、「本質的な問い」と「永続的な理解」は基本的に学年段階で変化しない。そこで変化するのは、パフォーマンスの質である。芸術科目の場合、「表現」、「鑑賞」というパフォーマンスにおいて求められる知識・技能の活用の仕方は一貫しているのである。

それゆえ、課題例から明らかのように、学年ごとに求められるパフォーマンスの質の変化をパフォーマンス課題文だけで十分に示すことは難しい。今後、パフォーマンス課題とともに学年段階を超えた長期的ルーブリックを作成することが必要となろう。

3. 「E.FORUM スタンダード」作成の意義

このような「E.FORUM スタンダード」の作成は、芸術科目に何をもたらすだろうか。まず、「本質的な問い」とその追究に関することである。これまで芸術科目においては、題材間の関わりや、各題材における様々な主題の学習成果としての長期的な学習の深まりはあまり意識されなかったのではないか。そこで、各題材において同じ「本質的な問い」を繰り返し問うことによって、これまでいわば羅列的にこなされていた題材が、一つの同じ方向性(たとえば表現すること)にあることが自覚されて構成されよう。すると、題材間の関連が意識され、各題材を経ることで、教師や子どもたちが自覚的に長期的なパフォーマンスの深まりを目指すようになることが期待できる。

また、パフォーマンス課題の設定は、従来の芸術科目におけるパフォーマンスに、真正の文脈においてオーディエンスを意識した主体的なパフォーマン

スや、子どもたち自らがパフォーマンスを洗練する機会を保障することをもちあす³。

さらに今回の第一次案は、あくまで学習指導要領を基に作成された。そのことによって、この作成における議論は、現在の芸術科目における目標・評価の課題についての議論へとつながっていった。たとえば、芸術科目においては一連のパフォーマンスの方略が主な内容となり、個別の内容や技能面の系統は不明瞭な部分もあることがみえてきた。

また、楽曲や美術作品の分析と評価の方法や、現代的な課題として異文化(異質なもの)とのつきあい方といった視点を取り入れる必要がある等の意見が出された。他に、「人はなぜ美を感じるのか」といった哲学的視点からの内容が必要ではないかという意見もあった。これらの意見は、「表現」と「鑑賞」だけでなく、理論、多文化教育、美学等を新たな領域として設定する可能性をも示唆するものといえる。

さらに、「美は表現者側の視点だけで完成するか」という意見も出された。このような意見は、芸術科目においてオーディエンスによる評価の視点を、どのように取り入れるのかという問題を提起している。

おわりに

教師や研究者がともに議論し作成することで、今後の教育改善のヒントを得る。そこに、「E.FORUM スタンダード」作成の最大の意義を見出したい。

今回の「E.FORUM スタンダード」は第一次案であり、今後多くの改訂が望まれるものである。多くのご批評をいただければ幸甚である。

¹ 京都大学大学院教育学研究科 E.FORUM 『「スタンダード作り」基礎資料集』2010年、162頁および168頁。

² 文部科学省『中学校学習指導要領解説 音楽編』2008年、文部科学省『小学校学習指導要領解説 音楽編』2008年、文部科学省『中学校学習指導要領解説 美術編』2008年。

³ 詳しくは、小山英恵「音楽科におけるパフォーマンス評価に関する一考察—『真正の評価』論に焦点をあてて—」『学校音楽教育研究』第17巻、2013年、3-14頁を参照されたい。